

アメリカ史学会 第56回例会（修士論文報告会）報告

第1報告

報告者：樋浦ゆりあ（一橋大・院）

タイトル：ムラトーたちの「痕跡」——アメリカ合衆国ヴァージニア州における人種保全法・出生登録・優生学運動とミックス／混血

コメンテーター：小野直子（富山大）

第2報告

報告者：前田祐梨子（東京大・院）

タイトル：第二次世界大戦期の空爆と道徳——アメリカのキリスト教会指導者らを中心に

コメンテーター：高田馨里（大妻女子大）

第3報告

報告者：吉田梨乃（一橋大・院）

タイトル：Doing History to Never Let the World Forget: Historical Practice to Preserve, Protect, and Promote the Legacy of Africatown, Alabama and the 110 Souls of the Last U.S. Slave Ship, *Clotilda*

コメンテーター：荒木圭子（東海大）

なお、登壇者の所属はいずれも2023年2月時点のものである。

日時：2023年4月22日（土）14:00-17:25

会場：オンライン開催（Zoom）

概要

第56回例会は例年通り、2022年度に提出された修士論文の報告会として実施された。参加者は約50名だった。

第1報告で樋浦氏は、アメリカにおいて「ミックス（mixed race）」とカテゴライズされる人々がアメリカの政治や社会においてどのような役割を果たしたのかという問いを出発点に、ヴァージニア州の人種保全法（1924年）の制定過程と出生登録制度の応用、およびその帰結を検証した。「純血な」白人種の保全を目的とした同法は、それまで曖昧だった白人概念を強固にすることが期待された。だが、同法は制定過程で換骨奪胎されており、助産師登録制度と出生登録制度の応用が人種の境界線を実質化する役割

を果たした。コメンテーターの小野氏は断種法や異人種間結婚に関するヴァージニア州の重要性を再確認することで、報告者のトピック設定の妥当性を高く評価した。そのうえで小野氏は、人種保全法の制定過程で同法が弱められた背景、黒人コミュニティにおける「ミックス」の位置づけ、助産師の教育レベルについて問うた。フロアからは、エゴドキュメント活用の可能性や、出生登録制度への人種保全法以外の要因（例えば、第一次世界大戦など）について質問が寄せられた。

第2報告で前田氏は、第二次世界大戦期アメリカに主としてキリスト教団体が牽引した無差別爆撃反対論の展開に、関連雑誌の包括的な読解を通じて追った。このような反対論の存在が、民間人への攻撃をタブーとする従来の戦時道徳規範が二次大戦中に失われたとする先行研究の指摘が不十分であることを示した。さらに同報告は、無差別爆撃をめぐる論争は、爆撃への賛成・反対という二項対立では捉えきれない複雑な様相を呈していたことを指摘した。コメンテーターの高田氏は、膨大な資料の丁寧な読解と英国を視野に入れた国際関係史のアプローチを高く評価した。そのうえで、無差別爆撃反対論における爆撃の行為者への視点、戦時検閲が反対論に与えた（検閲による情報へのアクセス不可能性ゆえの）影響について質問がなされた。フロアからは、15年戦争中のアジアにおける爆撃（日本軍による上海や重慶での絨毯爆撃）が無差別爆撃論争に与えた影響や、プロテスタント教会内の宗派的傾向に関する質問が寄せられた。

第3報告で吉田氏は、「最後の奴隷船」クロティルダ号の生存者が1868年に創設したアフリカタウンにおける歴史実践の様態を、インタビュー調査を通じて解明した。歴史実践を「人々が日常の実戦において歴史との関わりをもつ諸行為」とみなす保莉実の定義を援用しつつ、同報告は当該トピックをアフリカタウン設立～1990年代後半（「In the Public」の歴史実践）、1990年代後半～2018年（「With the Public」の歴史実践）、2018年以後（「新たな局面」の歴史実践）に分けて検証した。コメンテーターの荒木氏は、当事者による歴史実践が消費されることの是非、当該歴史実践が提供しようとする歴史像、調査者のポジショナリティや歴史家の役割等について問うた。また、フロアからはアフリカタウンの歴史実践への学校教育の関与について質問が寄せられた。

報告終了後のアフターセッションにも多くの方が参加し、討論は続いた。こうして、第56回例会は盛況のまま終了した。

文責 運営委員（佐藤）